令和４年度　日本大学スポーツ科学部　個人研究費　研究実績報告書

所属： スポーツ科学部　競技スポーツ学科
資格： 准教授
氏名： 近藤　克之

研究課題名	伴走者に関連するコンピテンシーを明示する試み
研究目的及び研究概要	本研究の目的は、伴走者に求められる能力要素を明示し、伴走者の資質を向上させることができるような、最適な伴走の実践を目指した学修プログラム（以下、伴走者育成プログラム）を開発するために必要となる基礎的情報を得ることであった。 伴走者を確保することは依然として難しい課題として認識されている（平井ほか，2020）。伴走者に求められる知識や技術、姿勢（態度）などは十分に示されているとは言えず、「まずは伴走体験会に参加してから」などのように、どのような役割を担い、活動を進めるのかを事前に十分に理解することができないまま、活動を開始するといった事例が多数見られる。内田（2018）が指摘しているように、求められているリテラシーを理解しなければ、仮に、「伴走者」という用語が認知されたとしても、伴走者としての活動が不安定になると考えられる。 先行研究を概観する限り、伴走者に求められているリテラシーを客観的に検討しているものが見当たらず、まずはこの状況にアプローチすることが課題であると考えられる。本研究では、リテラシーから発展したコンピテンシー概念（松尾，2016）を扱うこととした。すなわち、知識領域だけでなく、技能や態度領域を含んだ伴走者の全体的な能力を捉えていくことを目指している。この目的を達成するために、伴走熟達者に対して、半構造化インタビューを実施し、得られた内容を質的研究の観点から分析を行うこととした。
研究実績の概要 研究の進捗状況・得られた成果・今後の課題・研究実績等	研究の進捗状況 本研究の進捗状況は、順調である。現在、短距離走の伴走熟練者に対するインタビューを行なっており、分析を進めている。これらの分析結果の一部を用いて、2023年3月に開催された日本コーチング学会にてポスター発表を行った。短距離走の伴走初心者や、視覚障害のある競技者に対してもインタビューを行うことによって、様々な視点から伴走というものを捉えることができるようになる可能性も考えられる。 得られた成果 対象者は短距離走の伴走者に関する知識が＜何もない＞、視覚障害者との接触経験も過去に＜全然ない＞状況から伴走を開始し、当初は重度視覚障害のある競技者に＜教えてもらい＞ながら、伴走活動を開始した過程が捉えられた。対象者は当初、「自身の練習もできる」という動機が強かったが「互いの動作を限りなく一致させる」難しさを実感し、重度視覚障害のある競技者に適した伴走ロープの使用方法や声かけを模索しながら、重度視覚障害のある競技者が速く走るために、次第に、自身はどのようなことができるかという意識の変容が生じた（外発的動機づけを高めた）と考えられた。 今後の課題 本研究は、対象者１名に対する事例的な検討であり、仮説的で主観的な内容を可能な限り再現することを試みたものである。本研究では伴走者に焦点を当てた分析を行っているが、伴走は重度視覚障害のある競技者と伴走者が互いの動作の影響を受けながら行われていくことを踏まえ、重度視覚障害のある競技者からの視点も含めて検討する必要があると考えられる。短距離走の伴走者については、求められている役割が十分に整理されておらず、伴走者として活動する際に、戸惑いや不安が生じることがあると対象者は語っている。新たに短距離走の伴走者を育成する際に、本研究のような仮説的なロールモデルが示されることが、どのような事例提示になるのかを検討したいと考えている。 今後、対象者を増やし、重度視覚障害のある競技者からの視点も含めながら、研究を進めていく予定である。それらは、2023年7月開催の国際学会にて発表予定である。 研究実績 日本コーチング学会第34回大会（日本体育大学） 「短距離走の伴走者の熟達化に関する質的研究」2023年3月1日 優秀発表賞（ポスター発表、個別コーチング学）